

プロローグ 「母の思いつなぐ」 Inheriting my mother's mission to speak for her fellow victims

大野 洋子

Hiroko OHNO

市川市立高谷中学校特別支援学級補助教員

Ichikawa City Takaya Junior High School

原子爆弾は地上衝突炸裂ではなく上空500m地点での炸裂が他の兵器とは異なる。上空からであっても原子爆弾の及ぼした温度は地表面で3,000~4,000度、爆心地から1km地点でも1,800度。数字を如何に正確に並べても、現実世界を一瞬で消し去るその威力が伝え辛いことが歯痒い。数字だけでは想像が難しいが参考までに鉄が溶ける温度は1,500度。1km地点で生き残る人はいないだろうとも云われている中、0.5kmの場所で当時8才の女の子がその身に受けた事、起こった事、その後をこれから話したい。

母方の墓参りに行く度にそこに刻まれている8人の母の家族の名前を物心つく頃から見ていた。被爆に関しては何も語らない母だったが母の家族が住んでいた場所は凡そ想像が出来ていた為、私は母の家族8人の内7人は即死と長い間勝手に思い込んでいた。便宜上墓碑には7人が同じ日を刻まれるとそう思い込んでも仕方ない部分ではあった。

私が小学校3年生の時に迎えた8月9日に当時知識欲が旺盛な娘を心配してか父から「お母さんから原爆の事を語り出さない限り、家族であってもこちらから聞いてはいけない」と静かに云われた事を鮮明に覚えている。

母に、母の家族に何が起こったのか。それを知るのは私が二十代半ばに母が平和団体から出される本に手記を残すことになってからである。私はその手記の校正役として関わった。そこに書かれていたことは想像を遙かに超える過酷で悲しい母の被爆体験だった。涙で読み進められなかったことを覚えている。母は誰にも知られず命を奪われた家族の事を何らかの形で残したかったと話していた。手記を書いた当時はこの事が平和活動をする契機になるとは考えてもいない。

母は8月9日のことを『家族が消えた日』と言っている。

何の予告も前兆もなくすべてが奪われる。どれ程懸命に想像しても母の苦しみを私は一生理解出来る日は来ない。

映画「ヒトラーを欺いた黄色い星」の中で「不思議とその時の恐怖を覚えていない」と語ったユダヤ人女性がいた。母も原爆投下後数日は市内に居て生活していたがその事を全く思い出せない。人は生きていく為に過酷な苦しみや悲しみを自ら封印するのであろう。

あの日8月9日、空襲警報が一旦解除された後、母は家族と離れ友人の所へ遊びに行った。結果としてはこの事が母を救った。

11時2分一瞬の閃光だけは覚えている。母は奇跡的に助かったが遊んでいた友人は爆風で飛ばされた。その後、何が起きたのか訳も解らず焼けつくされた中を人や家畜が死んでいる様の中を泣きながら高台の友人の家から自宅まで戻る。新築したばかりの家は完全倒壊。母は未だに「当時の私が8才ではなく高学年か中学生だったら倒壊した家の下敷きになった母親りやと弟斉を救えたかもしれなかった。助けを呼びに大人を連れてきていたかもしれない」と悔やむ。母は倒壊した家屋の其処に母親りやが居るとも知らず必死に大人さえも混乱しているその状況の中で母親を探し回った。

途中、近所の人に教えられた場所に行き小学校1年生の妹涼子に会う。金柑の木の下で水を求める妹に「お母さんを探して来るから少し待っていて」と言っ母はその場を去ったが、それが妹涼子との最後だった。母はこの事も未だに「どうしてあの時に一杯の水を涼子にあげられなかったのか」と悔やむが、8才の母には仕方のないことではなかったのか。

4才の弟幸久は全身酷い火傷を負って泣いているのを倒壊した家屋の傍で見つける。

夕方の防空壕で8才と4才の兄弟は朝別れた家族を待ち続けた。他の家族の所には散っていた家族が戻って来るが母らの所には9人家族だったにも拘わらず誰一人戻って来ない。母は「仮令その会った後すぐに死に目に会うことになったとしても一人でもいいから会いたかった。」と云う。結局、誰も迎えが来ない不安と淋しさに潰される時間を8才と4才の二人は肩寄せあって過ごした。

大人がいない世界。これまで守ってくれていた両親も兄、姉もいない世界。

父兵作40才と一番上の兄好且15才は三菱に勤め、出勤したその後足取りが解っていない。何処で被爆したのか、何処で亡くなったのか一切が不明。母親りや36才と末弟の斉1才は倒壊した家屋の下で命尽きた。妹涼子7才は手当も受けられずその日に亡くなる。姉京子13才とは会えないままその最後を知るには50年近くかかった。

その後、生き残った母と弟は今まで会ったこともない遠縁の親戚に引き取られ、市内の生活から農家の田舎暮らしへと変わった。親が居ないことがどんなに惨めで辛いことかと母は今でも話す。

当時の母の日課に弟を連れての病院通いがあった。母自身も火傷を負っていたが自分の治療は全く覚えておらず4才の弟の辛さだけが記憶になっている。現在の母も小柄な体型である。本当は傷ついた弟を背負ってあげたかったが、それは叶わず時間をかけて病院を往復するしかなかった。幼い弟にとっては甘える親が居ず辛い包帯替えは只々我慢だけだった。全身包帯に覆われ動きも取れず、きっと痛みもあっただろう。遊び盛りの幼子が日長一日お縁に座り通り過ぎる人を見ているだけ。それを見ている8才の母もどんなに辛かったことか。

4才の弟幸久はあまりに短い生涯を原爆投下二ヶ月後に閉じた。苦しみだけの二ヶ月、母はいっそあの日8月9日に母らと家族と一緒に命を閉じたほうが幸久は幸せだったのではないかと悲しそうに話す。

4才の棺桶はとても小さかったことを覚えている、とつい最近聞いた。

4才の幼さであっても母にとってはかけがえのない家族だった。とうとう一人だけになった母の絶望は如何許りであったか。生き残った事を即答で幸せとは云えない厳しい人生が僅か8才の女の子に始まる。

祥月命日の墓参りで父や兄に会えるのではないかと期待していた事、それが生きる支えだった事、こうした話も随分後になって母から聞く。今でも旧姓徳永の名字を見つけるとその下に父と兄の名前が続かないか確認する母がいる。

現在、母は語り部として平和活動をしている。語り部の度に涙が零れるのは、原爆投下から73年経とうが何も終わってはず、家族の最後を確認できないままの母が8才のあの日の幼子に講演の時に帰っているからで

はないのか。

娘の私から見ると、出来たばかりの瘡蓋を剥がすような語り部活動。思い出したくない、忘れたいという思いの中で、語っては鮮明にそれらを思い出し、また、しばし封印する。この繰り返しが語り部。

母がそれでも今語るの、この苦しみを後世繰り返してはいけない、その一点だけである。

母からバトンを受け取るのではない。母も又何も言い遺すことも出来なかった人々の代弁者、継承者。母が手にしていたのは継承という一本のロウソクのような物ではないのかと考えるようになった。時間経過と共に短くなるロウソク。

母からその継承の火を貰い、私は一人でも多くの方に平和を灯したいと考えている。私は戦争経験者ではないが、平和への願いを引き継ぐことは出来る。

母は語り部の最後に所属している長崎平和推進協会の言葉に共感し「平和の原点は人の痛みが解ること。難しいことではありません。まずお友達、家族と仲良くしてください。」そう話す。

私は、その母の言葉に「忘れないこと」「歴史を改竄しないこと」を添えたい。戦争を経験していないわれわれは過去の出来事を忘れずに学ぶことが必要ということ。過去を知ることによって戦争を避ける道が見えてくると信じて。